

山村弥久馬

やまむら・やくま

福山誠之館校長(第9代)

経歴

生: 文久3年(1863年)11月1日、土佐(現高知県)に生まれる

没: 大正13年(1924年)、享年62歳、会津・飯盛山上の墓域に葬る

在任期間

明治45年(1912)5月3日～大正元年(1912)10月5日(5ヶ月)

略歴

文久3年(1863年)	—	土佐(現高知県)に生れる
明治11年(1878年)4月	15歳	志を立てて土佐を出る
明治12年(1879年)4月28日	16歳	東京に上り中島信行の書生となる
明治12年(1879年)7月23日～	16歳～	石川左玄に化学を習う
明治12年(1879年)8月28日～	16歳～	中島信行に洋籍を習う
明治18年(1885年)3月14日	21歳	東京師範学校初等中学師範科卒業
明治18年(1885年)3月14日～19年(1886年)4月	21～22歳	若松中学校二等教諭兼校長(廃校のため退職)
明治19年(1886年)5月13日	22歳	山形県中学校二等教諭兼師範学校教諭
明治19年(1886年)11月6日	23歳	山形県尋常中学校校長兼一等教諭
明治20年(1887年)11月8日	24歳	学習院傭教師
明治21年(1888年)3月21日	24歳	学習院助教授
明治23年(1890年)4月23日	26歳	高知県尋常師範学校教諭
明治23年(1890年)8月9日	26歳	高知県尋常師範学校教頭
明治27年(1894年)4月6日	30歳	学習院教授
明治29年(1896年)11月21日	33歳	福島県会津尋常中学校校長(第3代)兼教諭
明治33年(1900年)4月～34年(1901年)4月	36～37歳	福島県会津尋常中学校校長(第3代)兼教諭 休職
明治34年(1901年)4月12日	37歳	岩手県立盛岡中学校校長(第6代)
明治39年(1906年)3月1日	42歳	高知県立第二中学校校長
明治45年(1912年)5月3日～大正元年(1912年)10月5日	48歳	広島県立福山中学校(誠之館)校長
大正元年(1912年)～	48～	新潟県立長岡女子師範学校校長

大正5年(1916年)5月	52歳	
大正11年(1922年)6月	58歳	福島県立工業学校(現福島県立会津工業高等学校)校歌作詞
関係年表		
明治45年(1912年)7月30日	明治天皇崩御	
明治45年(1912年)8月24日	門田重長他3名退職	
明治45年(1912年)9月13日	明治天皇大葬	

生い立ちと学業、業績

「事績・業績」

卒業生の回想録によると、土佐っ子で気が荒いとあり、土佐の生まれである。22才の時、会津出身の東京師範学校長高嶺秀夫の推挙により、若松中学校長として赴任、その時籍を会津に移したようである。この校長については、本校に着任前の盛岡中学校長の時のことを記しておかなければならない。

明治34年(1901年)2月25日、盛岡中学で2名の教師に対する授業ボイコット・ストライキが3、4年生の間で発生した。その結果、時の知事、北条元利の裁定により収束、大筋において生徒側要求が通り、教員側は多田校長の休職を始めとして、23名中、19名までが、休職、転任、退職となった。この多田校長の後に就任したのが、会津中学校校長であった山村弥久馬であった。

実はこのストライキ事件は、当時、どの中学校においても頻発しており、それ自身珍しいものではなかったが、歌人石川啄木が、3年生のリーダーの1人として参加、啄木に与えた影響が大きかったということで、有名になったのである。啄木の年譜解説によれば、その後、「元学習院教授山村弥久馬が新校長になり、学校側の強硬な生徒指導で校内の自由な雰囲気は一掃される。」ということになる。そして、翌明治35年(1902)10月27日、啄木は退学願いを提出、盛岡中学校を退学する。ストライキ事件そのものはこの校長とは無関係であったが、その後の啄木の退学は、この校長の関わるものであった。

土佐っ子で、それに負けないぐらい気性が荒いと評された会津で鍛えられた硬骨漢ぶりは本校でも発揮された。『誠之館百三十年史』は次のように記している。

「木綿がすりの着物に梅ぼし弁当で、気性は激しかったようである。これが人事面にあらわれて、国漢科の門田重長(当時82才)、同じく国漢科の井出猪之助(67才)、兵式体操の土岐嘉忠太(48才)、武術教師の旭義照(29才)などの諸氏が、いずれも大正元年(1912年)8月24日付けをもって退職させられている。それぞれに退任の理由はあるのであろうが、沈滞した校風を刷新するための措置であったと思われる。しかしこの決断に対して、門田・井出両氏は、ともに藩校誠之館以来の宿老であったから、同窓生の一部には非難の声があったようで、同校長は在任わずか5ヶ月にして、富山県立高岡中学校長へ転出した。(*1)」(『誠之館百

三十年史・上巻』819頁)

短い在任期間であったが、まことに異色の校長だった。校風刷新は簡単には成らぬが、人事面での大薙刀が次の校長の仕事の助けたことは間違いない。 松岡義晃(昭和28年卒)

(※1)『高岡中学・高岡高校百年史』には、この時期に山村氏が校長であることの記載はない。

関係資料1:『誠之館百三十年史(上巻)』、819頁、福山誠之館同窓会編刊、昭和63年12月1日

2004年10月26日更新:関係略歴●2005年4月4日更新:関係略歴、本文●2005年7月20日更新:経歴●2006年3月27日更新:本文●2008年8月14日更新:経歴、本文●2009年1月13日更新:経歴●2011年9月14日更新:経歴●